

源光遺跡

—都市計画道路源光町田線内沢道路改良工事に伴う発掘調査報告書—



平成 24 年 3 月

宮城県栗原市教育委員会

源光遺跡

—都市計画道路源光町田線内沢道路改良工事に伴う発掘調査報告書—

序 文

宮城県の北西部に位置する栗原市には、豊かな自然と歴史的遺産が数多く残っております。市内には国指定文化財や県指定文化財、市指定文化財のほか様々な文化財が地元の方の努力により大切に守り継がれてきました。これらの貴重な歴史的遺産を次の世代に継承していくことは、今の時代を生きるわれわれの責務であります。

本書は都市計画道路改良に伴い発掘調査を実施した源光遺跡の発掘調査報告書です。埋蔵文化財の保護を行ううえで開発計画との調整は重要であります。栗原市教育委員会では埋蔵文化財の範囲を周知し、速やかに開発計画を把握し、協議や調整を行い、開発担当部局から埋蔵文化財の保護についてご協力をいただいているところです。今回の発掘調査は、埋蔵文化財の隣接地に位置しており、確認調査の結果、遺構が確認されたものです。今後も、埋蔵文化財の範囲を確定していく作業を行っていくとともに、周知や協議、調整を徹底して埋蔵文化財の保護に尽力していきたいと考えています。

最後になりましたが、調査にご指導・ご協力していただきました宮城県教育庁文化財保護課、宮城県土木部北部土木事務所栗原地域事務所、発掘調査を実施するにあたりご協力いただきました地元の方々に深く感謝申し上げます。

平成24年3月

栗原市教育委員会教育長 亀井芳光

目 次

序 文
目 次
例 言

I.	遺跡の位置と周辺の遺跡	1
II.	調査に至る経緯と調査方法.....	1
III.	基本層序	7
IV.	検出された遺構と遺物	
1.	竪穴住居跡と出土遺物	9
2.	遺構外出土遺物.....	18
V.	考 察	
1.	竪穴住居跡の年代について.....	20
2.	竪穴住居跡の構造について	21
VI.	まとめ.....	21
写真図版		
報告書抄録		

図 目 次

第1図	源光遺跡の位置と周辺の遺跡	第6図	1 B号住居跡
第2図	源光遺跡調査地点と周辺の遺跡	第7図	1 B号住居跡出土遺物
第3図	調査区の位置	第8図	1 A号住居跡
第4図	基本層柱状図	第9図	2号住居跡
第5図	事前調査区平面図	第10図	2号住居跡出土遺物

表 目 次

第1表	1 B号住居跡主柱穴属性表	第5表	1 A号住居跡土層注記
第2表	1 B号住居跡土層注記（1）	第6表	2号住居跡土層注記
第3表	1 B号住居跡土層注記（2）	第7表	2号住居跡出土遺物観察表
第4表	1 B号住居跡出土遺物観察表	第8表	各住居跡出土遺物の特徴

写 真 図 版

写真図版1 1 B号住居跡

1 B号住居跡（南より）、1 B号住居跡カマド検出状況（南西より）、1 B号住居跡カマド（新段階、南西より）、1 B号住居跡カマド（新段階、南より）、1 B号住居跡カマド（古段階、南より）

写真図版2 1B号住居跡（2）

1B号住居跡（南西より）、1B号住居跡堆積状況（南西より）、1B号住居跡カマド断面（南西より）、1B号住居跡カマド側壁断面（南より）、1B号住居跡カマド側壁除去状況（南西より）

写真図版3 1A号住居跡・1B号住居跡（3）

1A号住居跡（南西より）、1B号住居跡カマド周辺貼床・1A号住居跡壁材抜き取り痕跡断面（西より）、1A号住居跡壁材掘り方（西より）、1B号住居跡外延溝（東より）、1B号住居跡窓穴外延溝断面（東より）

写真図版4 2号住居跡

2号住居跡（南より）、堆積状況（南より）、西辺周溝堆積状況（南より）、カマド（南より）、煙出しピット遺物出土状況（東より）

写真図版5 出土遺物

例 言

1. 本書は、宮城県土木部北部土木事務所栗原地域事務所による都市計画道路源光町田線道路改良工事に伴う源光遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査から報告書作成にいたる一連の作業は、調査原因となった事業主体者である宮城県北部土木事務所から依頼を受け、栗原市教育委員会が行ったものである。
3. 土層や土器の色調表現は『新版標準土色帳』（小山・竹原編1994、日本色研事業株式会社）に準拠し、土性区分については国際土壤学会に準拠している。
4. 座標は世界測地系を用いている。また、図中にある方位は真北を表している。
5. 調査区全体図は1/100、遺構平面図及び断面図の縮尺1/60とした。また、遺物の縮尺は1/3に統一し、スケールを添えた。なお、断面黒塗りは須恵器を示している。
6. 遺物写真的縮尺は任意である。
7. 発掘調査および本書の作成に際しては下記の方々からご教示・ご指導を賜った。
高橋栄一、豊村幸宏（宮城県教育庁文化財保護課）
8. 本書の執筆・編集は課員の検討を経て安達訓仁が行った。
9. 調査によって得られた資料は全て栗原市教育委員会（栗原市築館出土文化財管理センター）で保管している。

調査項目

遺 跡 名 源光遺跡（宮城県遺跡登録番号：41068）
所 在 地 宮城県栗原市築館字源光内沢
調 査 原 因 都市計画道路源光町田線改良工事
調 査 面 積 328m²
調 査 期 間 確認調査 平成22年8月23～25日
事前調査 平成23年6月29日～8月24日
調 査 担 当 確認調査 宮城県教育庁文化財保護課 初鹿野博之 古田和誠
栗原市教育委員会文化財保護課 安達訓仁
事前調査 栗原市教育委員会文化財保護課 安達訓仁
発掘調査参加者 小野寺憲治 織笠とき子 後藤直之進 白鳥 力 庄司玉夫 庄司佳郎
整理作業参加者 斎 安奈

I. 遺跡の位置と周辺の遺跡

源光遺跡は栗原市築館地区に所在する。奥羽山脈から東側に延びる築館丘陵の北側、標高約36mの河岸段丘低位段丘上に立地し、北側には一迫川が東流する。本遺跡の周辺は市街地となり、宅地や畠地、田地として利用されているほか、東側には山林がみられる。

遺跡周辺では一迫川や二迫川などの河川流域の丘陵や段丘上に古代の遺跡が多数確認されている。本遺跡の北約3.8kmには国史跡伊治城跡が所在している。これまでの発掘調査により、『続日本紀』にみえる神護景雲元年（767）に律令政府が東北經營のため設置された伊治城であることが確定した（築館町教委1993ほか）。伊治城跡周辺の丘陵では多くの集落が確認されており、伊治城が設置された8世紀後半以降、確認される集落数は大きく増加することが判明している。



1:源光遺跡 2:伊治城跡

第1図 源光遺跡の位置と周辺の遺跡

II. 調査に至る経緯と調査方法

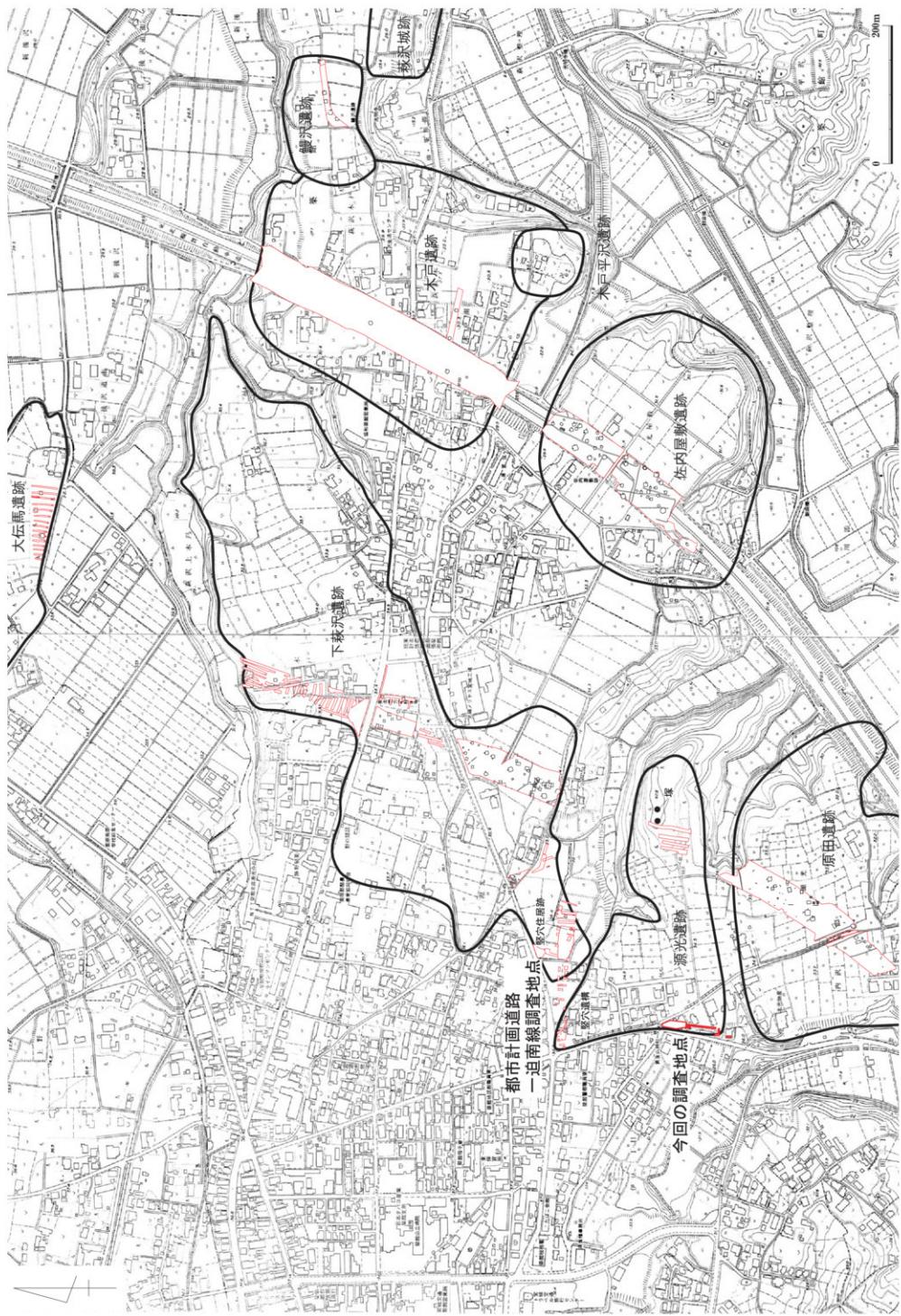
源光遺跡は平成14年、国道4号線建築バイパス建設に伴う分布調査により縄文土器片、石器、土師器の破片が採集されたことや丘陵部分で3基の塚が発見されたことから埋蔵文化財包蔵地として登録された。平成15年、宮城県教育委員会により実施された確認調査では造構や遺物は確認されず、源光遺跡に隣接する原田遺跡からは古代の堅穴住居跡、堅穴遺構、掘立柱建物跡などが確認され、堅穴住居跡からは小札等が出土し、下萩沢遺跡からは古代の堅穴住居跡、堅穴遺構、掘立柱建物跡、木棺墓、縄文時代の堅穴住居跡などが確認され、両遺跡ともに8世紀後半頃を主体とし、焼失住居が多いことや下萩沢遺跡では柱筋をそろえた建物跡があることから、律令国家や伊治城跡とかかわりが深い集落と考えられている（宮城県教育委員会2009）。

国道4号線建築バイパスの建設が進んだことに伴い、栗原市建設部都市計画課ではこれにとりつく都市計画道路一迫南線の改良工事の計画が具体化された。対象地は下萩沢遺跡に隣接することから、工事に先立ち、栗原市教育委員会により平成19年12月に遺跡の西側隣接地で確認調査が行われ、古代の堅穴住居跡などが発見された。さらに平成22年5～7月にかけて栗原市教育委員会により事前調査と路線西側部分の確認・事前調査が実施され、大規模な沢の西側においても古代の造構が存在することが確認された（栗原市教育委員会2011）。

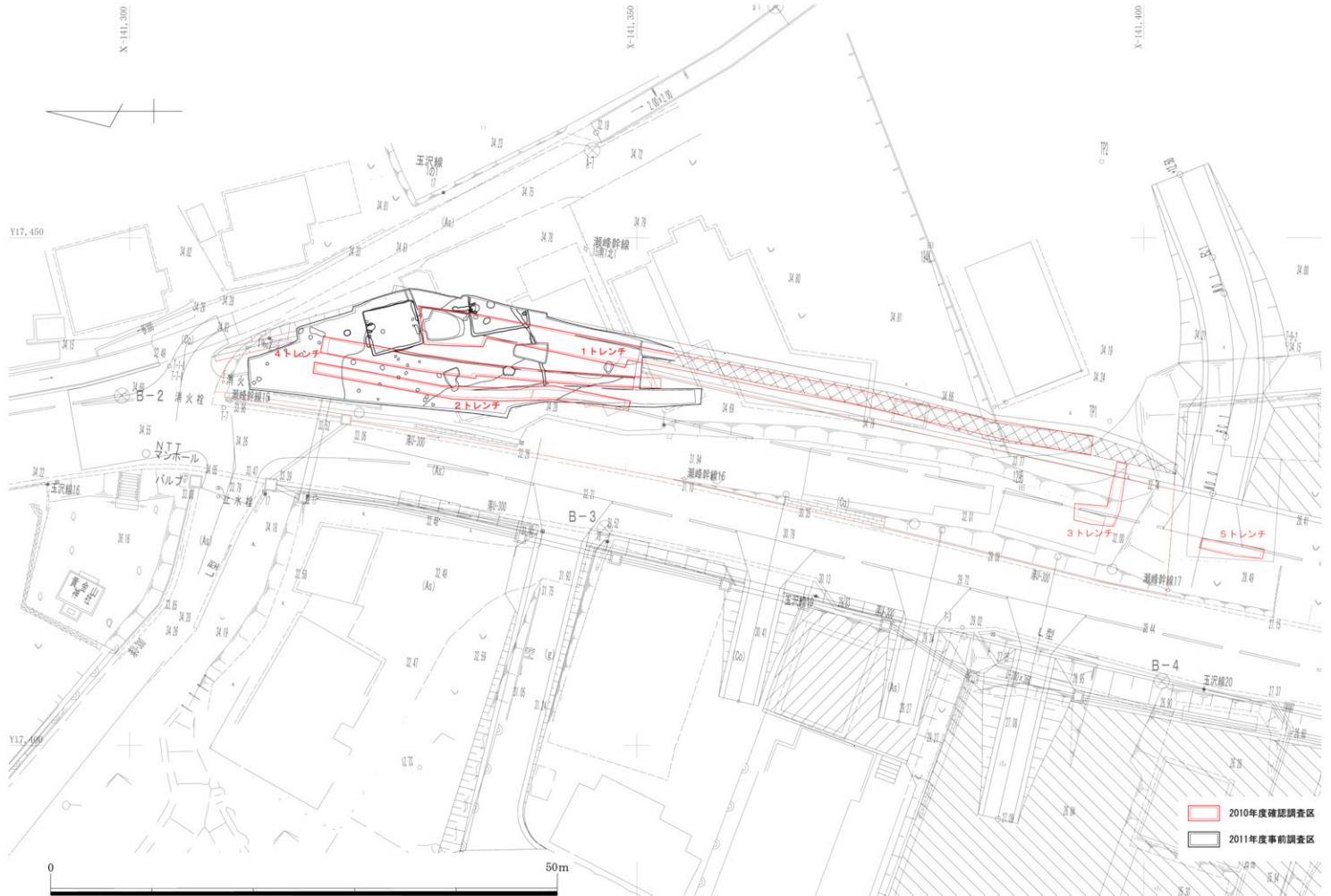
宮城県土木部北部土木事務所栗原地域事務所では都市計画道路一迫南線に接続する計画である都市計画道路源光町田線内沢道路の工事を開始していた。工事範囲の終点部分は原田遺跡、源光遺跡に隣接する丘陵部分にあたり、①平坦面がみられ西側に緩やかに傾斜すること、②都市計画道路一迫南線の発掘調査の成果により遺跡範囲が西側にのびる可能性があると想定されたことから協議を行った。平成22年7月23日付けで協議書が提出され、平成22年8月11日に宮城県北部土木事務所、宮城県教育委員会、栗原市教育委員会と協議により、工事範囲の北側について確認調査を実施することになった。その後、平成22年8月17日付けで埋蔵文化財発掘の通知が提出された。

確認調査は宮城県教育委員会の協力を得て平成22年8月23～25日に実施した。工事予定範囲内に幅1～2m、任意の長さで調査区を5ヶ所設定し、重機を用いて表土を除去し、遺構確認作業を行った。確認調査面積は163m²である。その結果、対象地北側の平坦な場所で堆積土中に灰白色火山灰が含まれる堅穴住居跡1軒と外延溝とみられる溝跡、堅穴住居跡の可能性が高い落ち込み1基、土坑とみられる落ち込み2基が確認された。これらの成果を踏まえ、平成22年9月に保存協議を実施したが、位置及び工法変更が難しいことから事前調査を行うこととなった。しかし、宮城県教育委員会、栗原市教育委員会はほかの業務とのかかわりから平成22年度中に事前調査を実施することが難しく、平成23年度当初より栗原市教育委員会が担当となり記録保存のための事前調査を実施することとなった。なお、周辺の地形から源光遺跡の範囲拡大を行なうこととなった。

平成23年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）への対応のため、事前調査開始は大幅に遅れた。平成23年6月15日付けで委託契約を行い、事前調査は平成23年6月29日から開始した。調査区の設定と器材の搬入を行い、6月29日から7月1日まで重機を用いて表土剥ぎを行った。その後、人力により遺構検出を実施した。確認調査で確認された土坑とみられる落ち込みはいずれも風



第2図 源光遺跡調査地点及び周辺の遺跡



第3図 調査区の位置

倒木であることが判明した。最終的に確認された遺構は堅穴住居跡2軒である。いずれも深さは0.2～0.4mほどで、良好な残存状況であり、さらに1号住居跡ではカマド天井部の一部が残存していた。遺構の精査と各種記録作成を行い、8月24日に野外調査を終了した。その後、調査で排出された廃土が度重なる東日本大震災に伴う余震により亀裂が発生し、工事施工までに時間があることから廃土により調査区の埋め戻しを行なった。

出土遺物の水洗いは調査期間中に実施し、引き続きネーミングと接合作業を行った。その後、遺物調査、実測図作成を行なった。また、遺構については平面図、断面図の整理を行い、遺構台帳を作成した。報告書を作成し、事業の一切を終了した。

III. 基本層序

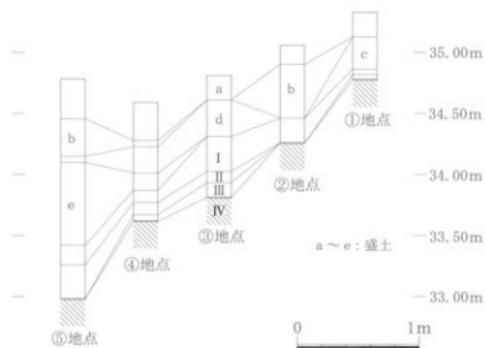
調査区内は以前まで宅地として利用されており、宅地造成に伴い盛土整地が行なわれていた。南西側には幅の広い沢があり、調査地点は北東から南側にゆるやかに傾斜する西斜面にあたる。このため南西側ほど盛土整地が厚い。表土除去後、盛土整地の下において若干の相違はあるが、以下の層が確認された。遺構はIV層で確認されたが、掘り込み面については、耕作などの影響のためか、遺構が分布する範囲では古代とみられる旧表土がみられないことから確認できなかつた。

I層 黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト。調査区全体に分布する。盛土整地以前の表土で、耕作土と考えられる。

II層 黒褐色(10YR2/3)粘土質シルト。斜面側に分布し調査区中央付近から南側にみられる。

III層 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト。調査区内では部分的にみられる。漸移層である。

IV層 黄褐色(10YR5/6)粘土。下層起源のバミス、礫を多く含む。また、標高の高い南東側ではバミス、礫を含まない明黄褐色(10YR5/6)粘土である。



第4図 基本層柱状図

IV. 検出された遺構と遺物

検出された遺構は堅穴住居跡2軒である。遺物は、各遺構から土師器、須恵器、鉄製品、遺構外から土師器、須恵器や近世から近代の陶磁器の破片がわずかに出土した。遺物総量はテン箱2箱である。

Y17, 425

Y17, 430

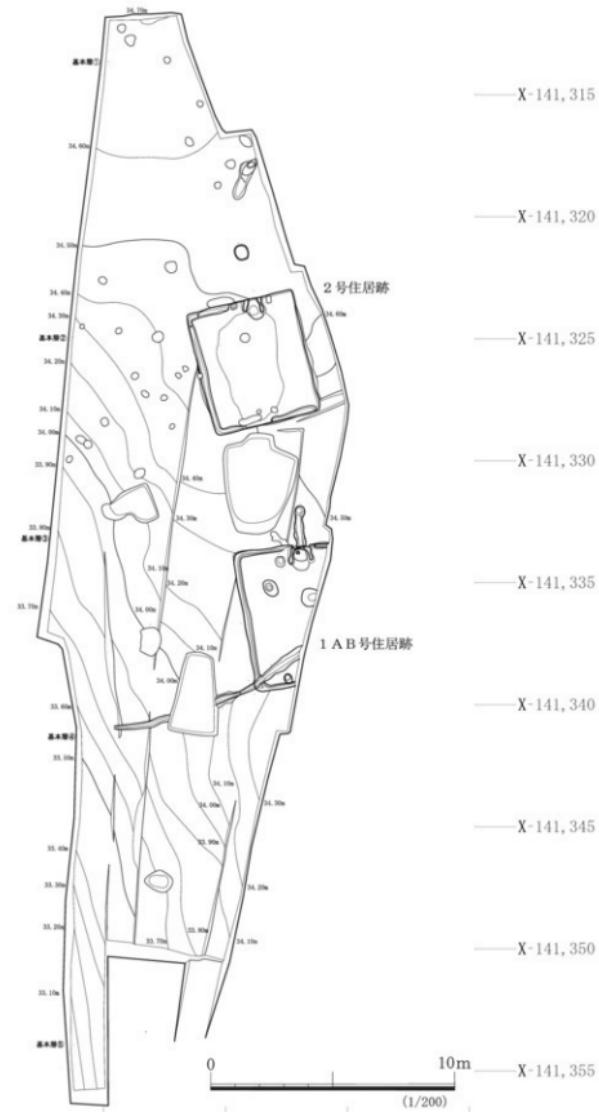
Y17, 435

Y17, 440

Y17, 445

Y17, 450

X-141, 310



第5図 事前調査区平面図

1. 壺穴住居跡と出土遺物

【1B号住居跡】

調査区中央に位置する。IV層（地山）で確認された。調査区東側につづくことから、平面形は明確ではないが、隅丸方形と考えられる。東西3.83m以上、南北5.76mである。方向は西辺で計測するとN - 10.5° - Wである。堆積土は細かい地山粒や炭粒を含む黒褐色粘土質シルトでレンズ状に堆積していることから自然堆積とみられる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは最も残りのよい北辺東側で0.38mである。床面はほぼ平坦である。掘り方埋土を床としており、埋土は明黄褐色～にぶい黄褐色砂質シルトである。また、カマド周辺ではカマド造営に伴う貼床が確認された。

カマドは北辺で確認された。確認された位置からほぼ北辺中央に位置すると考えられる。燃焼部と煙道部からなる壺穴内部に設けられた造り付けのカマドである。総長2.63mである。燃焼部が位置する範囲は後述する1A号住居跡壁材を抜き取り、掘り方埋め土により床面が造成された後、さらにカマド設置部分では長さ1.84m、幅0.68m、厚さ0.10mの黄褐色粘土により整地が行われた後にカマドが構築されている。カマドは側壁と壺穴壁際では幅5cmではあるが天井部が確認された。燃焼部は長さ1.00m、幅0.63mである。底面は支脚と焼け面の関係から2時期ある。新段階のカマドでは機能時の堆積土が当初の焼け面上に堆積した後に土器窯底部破片が逆位に置かれていている。支脚設置部分を若干堀くぼめ、窯内部に白色粘土をつめ、支脚の周囲には土器窯の体部破片を置いて固定している。また、記録を作成せずに取り上げてしまったが、支脚である窯の上にさらに土器窯底部がのっている状況であった。古段階のカマドでは底面で焼け面が確認されている。焼け面は径0.21～0.24m程の楕円形である。底面は奥壁に向かいやすや傾斜するがほぼ平坦であり、奥壁部分で急に立ち上がる。側壁はにぶい黄褐色粘土質シルトにより構築されており、幅は0.27m、高さは0.27mである。側壁を設置するに当たり、特に右側壁は溝状に堀くぼめていた。天井部と側壁の一部はカマド燃焼部内部、煙道部、カマド前面に崩落し、流出した状況で確認されている。奥壁、側壁は火熱を受け赤変している。また、側壁除去後、側壁構築土に覆われるカマド機能時のものとみられる堆積土が整地層である黄褐色粘土上に部分的に残存しており、古段階以前にあったカマドにかかる堆積層と考えられた。煙道部は長さ1.63m、幅0.36mであり、煙り出しビットに向かい傾斜する。底面はほぼ平坦で壁は急に立ち上がる。深さは0.26mである。燃焼部に近い地点の堆積土は地山と類似していることから天井崩落土とみられ、下部に焼け面がみられた。煙り出しビットは径0.36～0.40mの楕円形であり、深さは0.67mである。堆積土から大別2層に分けることができる。上層には焼土、炭化物等がみられるが、下層には見られなかった。煙り出しビットが掘り直された可能性もあるが、確定できなかった。

ビットは南辺壁際と（P1）カマド左側壁脇（P2）で確認された。位置関係から主柱穴とみられる。いずれも柱は抜き取られている。詳細は第1表に示す。

カマド前面で浅い落ち込みで

第1表 1A号住居跡主柱穴属性表

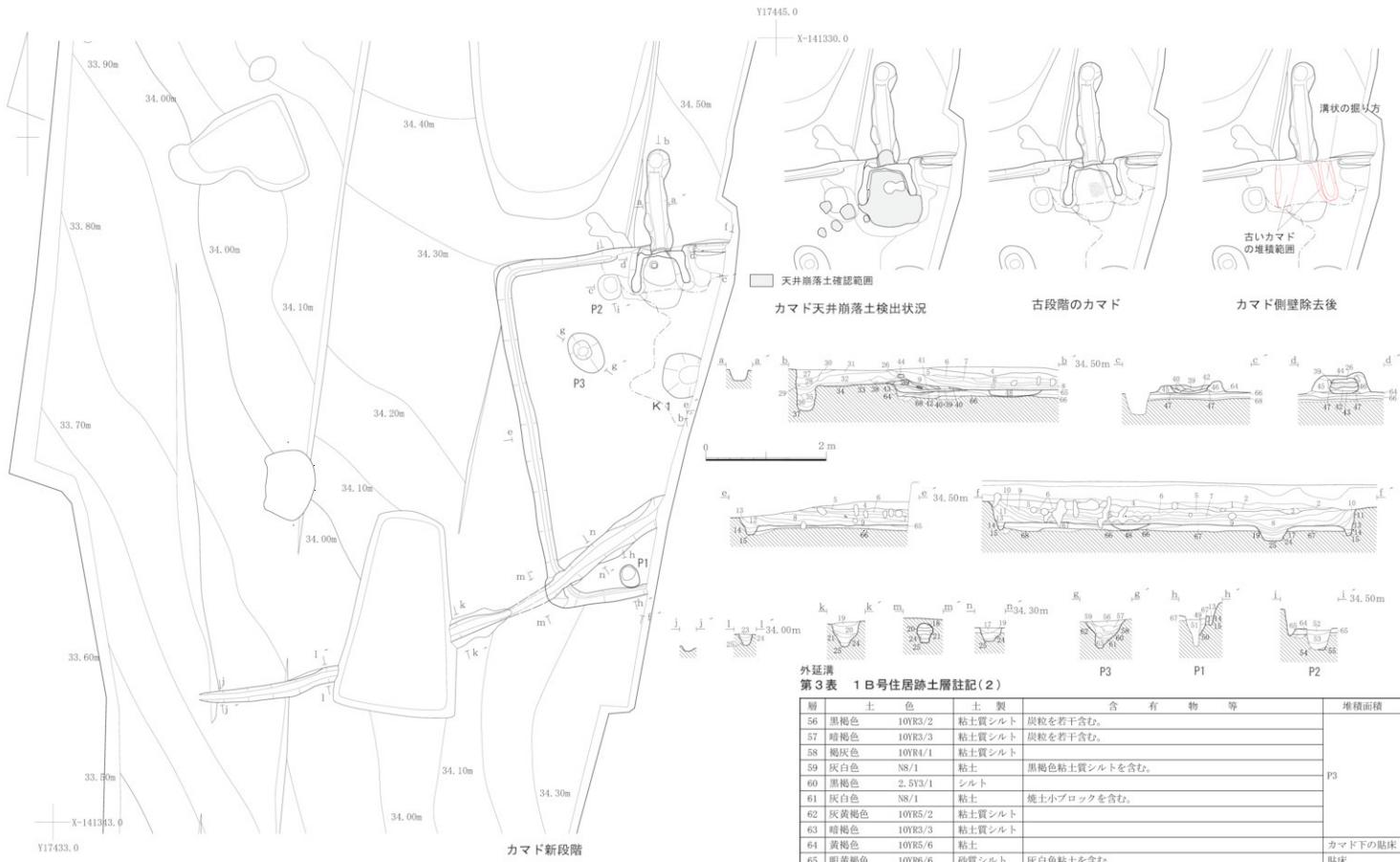
No	平面形	長軸	短軸	深さ	抜き取り	柱痕跡	備考
P 1	隅丸方形	0.38	0.32	0.50	あり	径0.10	
P 2	隅丸長方形	0.41	0.37	0.34	あり	不明	底面付近まで大きく抜き取られる。

（単位はm）

あるK1、床面北西側でK2を確認した。K1は長軸0.71m、短軸0.61m以上、深さは0.08mであり、平面形は隅丸方形とみられる。底面はほぼ平坦で、壁は北側では急に、西側及び南側ではゆるやかに

第2表 1B号住居跡土層註記（1）

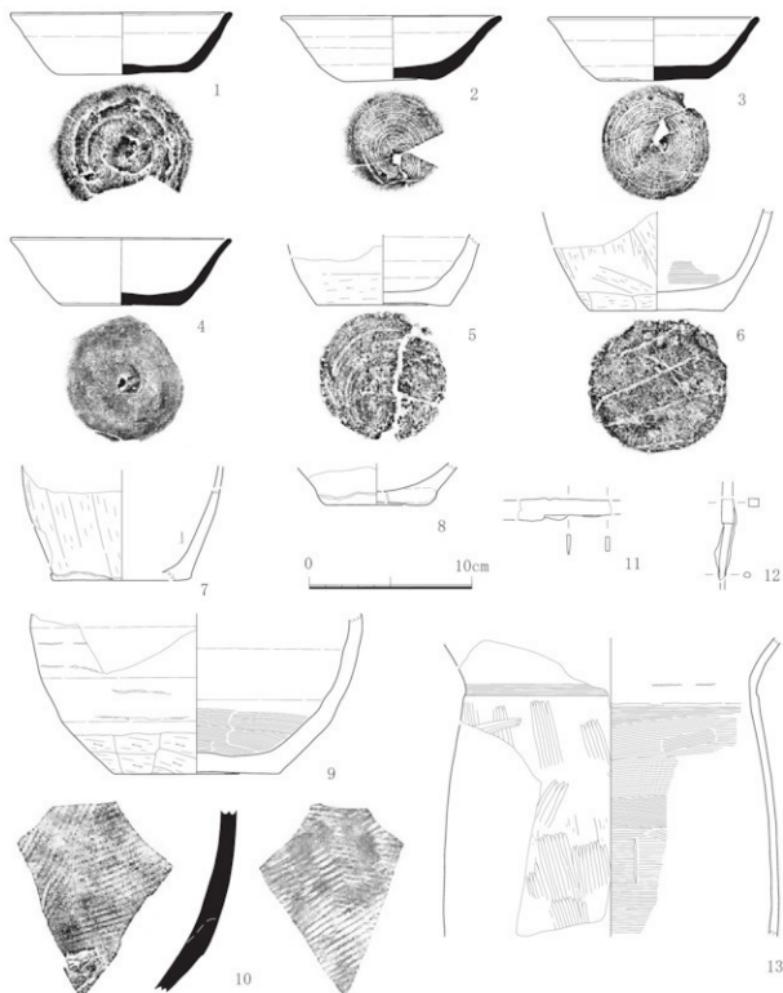
層	土 色	土 製	含 有 物 等	堆積面積
1	黒褐色	10YR3/2	シルト	
2	にぶい黄褐色	10YR5/3	シルト	地山ブロックをまばらに、炭粒を微量、白色砂を含む。
3	灰黄褐色	10YR4/2	粘土質シルト	
4	黒褐色	10YR3/1	シルト	
5	黒色	10YR2/1	シルト	炭粒若干含む。
6	灰白色火山			
7	黒褐色	10YR3/2	シルト	
8	褐色	10YR3/1	砂質シルト	
9	暗褐色	10YR3/3	砂質シルト	
10	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	暗褐色砂質シルト含む。
11	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	
12	褐色	10YR4/6	シルト	地山小ブロックを若干含む。
13	黄褐色	10YR5/8	粘土	にぶい黄褐色シルトブロックを含む。
14	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂質シルト	黒褐色シルトを含む。
15	黒褐色	10YR3/2	砂質シルト	にぶい黄褐色砂質シルト、炭粒を含む。
16	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土質シルト	白色粘土ブロック、焼土ブロックを含む。
17	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	
18	灰黄褐色	10YR4/1	粘土	
19	にぶい黄褐色	10YR5/3	粘土質シルト	
20	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	地山を多く含む。
21	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土質シルト	炭粒を微量含む。
22	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	
23	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト	
24	黄褐色	10YR5/6	粘土質シルト	黒褐色を斑状に含む。地山崩壊土。
25	灰黄褐色	10YR4/2	粘土質シルト	地山、黒褐色を含む。
26	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土質シルト	天井崩落土ブロック、地山ブロックを含む。
27	灰白色砂	主体とし、黒褐色シルト、地山ブロックを含み、焼土ブロックを含む。		
28	灰黄褐色	10YR5/2	シルト	地山ブロックを含み、焼土小ブロックを若干含む。
29	黒色	10YR1.7/1	粘土質シルト	
30	にぶい黄褐色	10YR5/3	砂質シルト	地山小ブロックを若干含む。
31	暗褐色	10YR3/3	砂質シルト	地山小ブロック、地山ブロックをやや多く含む。
32	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	地山ブロックを多く、焼土ブロックを若干含む。
33	にぶい赤褐色	2.5YR4/3	粘土質シルト	焼土ブロックを多く含む。
34	黒色	10YR1.7/1	粘土質シルト	焼土小ブロック、焼土ブロック、地山ブロックを含む。
35	灰黄褐色	10YR5/4	粘土質シルト	
36	にぶい黄褐色	10YR7/3	粘土質シルト	
37	灰黄褐色	10YR4/2	粘土質シルト	地山小ブロックを若干含む。
38	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土質シルト	地山ブロックをまばらに含む。
39	灰白色～にぶい黄褐色	10YR8.1～7/2	砂質シルト	かたい
40	焼けた粘土層			スサ入り、灰黄褐色粘土質シルトを含む。
41	暗赤褐色	5YR7/2	粘土質シルト	焼土をまばらに含む。
42	暗灰黄色	2.5Y4/2	粘土質シルト	焼土ブロックを多く含む。
43	黒褐色	2.5Y2/1	粘土質シルト	焼土小ブロック、焼土粒、白色粘土小ブロックを若干含む。
44	灰白色	N8/0	砂質シルト	45よりも白い
45	灰白色	2.5Y8/1	砂質シルト	かたい
46	にぶい黄褐色	10YR7/3	砂質シルト	焼土ブロック、焼けた粘土を含む。
47	極暗赤褐色	5YR3/2	粘土質シルト	炭粒、焼土粒を多く、白色粘土ブロックを若干含む。
48	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト	地山小ブロックをやや多く、炭粒、焼土粒をまばらに含む。
49	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト	地山小ブロックを若干含む。
50	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト	地山小ブロックをまばらに含む。
51	灰黄褐色	10YR4/2	砂質シルト	黒褐色土をまばらに含む
52	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	斑状の黑色土粒、褐色粘土小ブロックを織状に含む。
53	にぶい黄橙色	10YR6/3	砂質シルト	黒色土粒、白色粘土質シルト小ブロックをまばらに含む。
54	灰色	N4/0	砂質シルト	
55	明黄褐色	10YR6/6	粘土	灰黄褐色砂質シルトをまばらに含む。



第6図 1B号住居跡

解	土 色	土 質	含 有 物 等	堆積面積
56	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト 炭粒を若干含む。	
57	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト 炭粒を若干含む。	
58	褐色	10YR4/1	粘土質シルト	
59	灰白色	N8/1	粘土	
60	黒褐色	2.5Y3/1	シルト	P3
61	灰白色	N8/1	純土小ブロックを含む。	
62	灰黃褐色	10YR5/2	粘土質シルト	
63	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	
64	黄褐色	10YR5/6	粘土	カマド下の貼床
65	明黄褐色	10YR6/6	砂質シルト 灰白色粘土を含む。	貼床
66	にぶく黄褐色	10YR5/4	砂質シルト	
67	暗褐色	10YR4/4	砂質シルト 黄褐色粘土を含む。	B削り方
68	暗褐色	10YR3/3	黄褐色粘土小ブロックを含む。	

立ち上がる。堆積土は自然堆積である。K 2は堆積土除去の段階から、灰白色火山灰が落ち込んでいる状況であり遺構の存在が想定されていたが、最終的に検出できたのは掘り方除去中である。平面形は長軸0.73m、短軸0.52m、深さは0.57mの橢円形である。底面はやや凹凸があり、底面から急に立ち上がり、中ほどから上部が開く漏斗状である。堆積土には炭化物が含まれ、自然堆積とみられる。断面形や堆積土の状況から木の根による搅乱と考えられる。



第7図 1B号住居跡出土遺物

周溝はカマドを除き、確認できた範囲では全周する。幅0.17~0.22m、深さ0.13~0.17mで、断面形はU字型である。堆積土は地山小ブロック、炭粒を含む黒褐色砂質シルトであり、自然堆積である。外延溝は住居内を通過し、南西隅から竪穴外にのび、ゆるやかに弧を描きながら8.38m続く。外延溝延長の調査区壁面を検討したが、堆積土は確認されない。竪穴南西隅から0.62m分は天井が残存しており、トンネル状となり残存していた。竪穴内では幅0.32m、深さ0.24mであり、周溝よりも深い。竪穴外では最大で深さ0.41m残存している。底面はほぼ平坦で、壁はやや急に立ち上がる。底面レベルは竪穴内から西側にゆるやかに傾斜している。堆積土は自然堆積と考えられる。

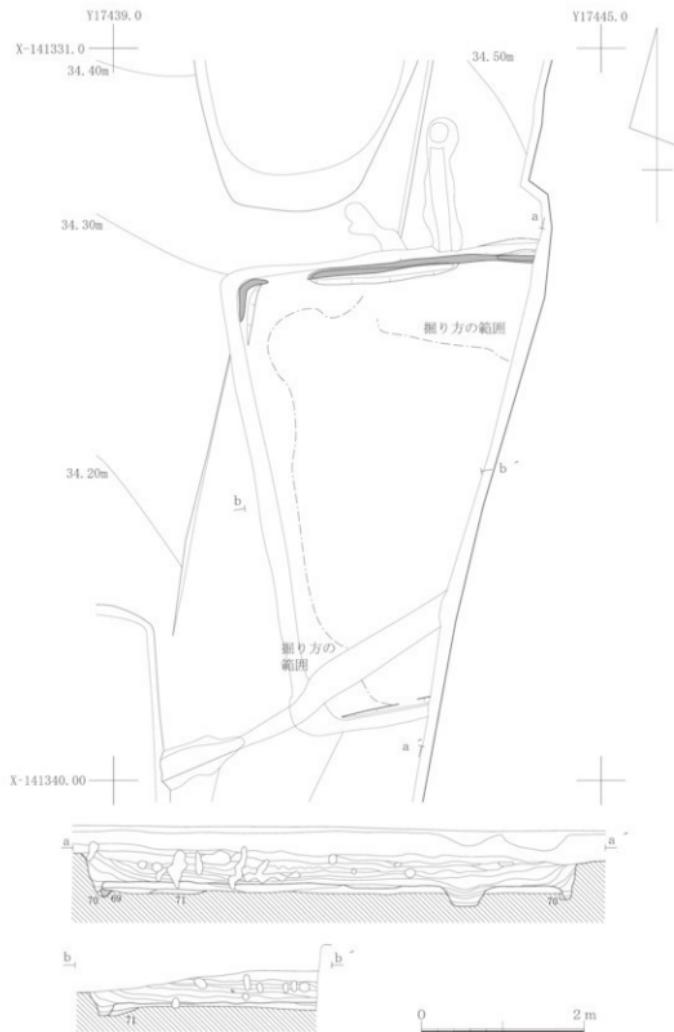
遺物は堆積土及び床面上より須恵器壺、甕、土師器壺、高台付壺、甕の破片、鉄製品が出土した。床面上からの遺物はほとんどなく、これらは住居廃絶後に流れ込んだものと考えられる。須恵器壺の底部切り離しは回転ヘラ切り、回転ヘラ切りの後ナデ調整、回転糸切り、回転糸切りの後ナデ調整がある。甕は外面が平行タキ、内面は平行タキや無文、青海波紋である。土師器壺は内面がヘラミガキ・黒色処理された製作にロクロを用いる小破片がある。甕は製作にロクロを用いたものと用いないものがあり、長胴形のものである。体部調整はヘラケズリされているものが多い。カマド天井崩落土からは土師器甕、機能時の堆積土より土師器甕が出土し、製作にロクロを用いないものが多いが、ロクロを用いるものもある。土師器甕破片は支脚周囲に多くみられ、支脚を固定する際に用いられている。カマド左側壁除去後に確認されたカマド堆積土とみられる黒褐色土より製作にロクロを用いない土師器甕破片が出土している。

外延溝堆積土から出土した須恵器壺の底部切り離しは回転ヘラ切りとみられる。

これらのうち器形や特徴がわかるものを図示した（第7図）。

第4表 1B号住居跡出土遺物観察表

No.	遺構名・層位	種別	器種	特徴	図版
1	堆積土	須恵器	壺	残存: 3/5。器高: 3.8cm、口径: 13.4cm、底径: 8.0cm、外面: ロクロナデ。灰色 (5Y4/1)。 底面: 回転ヘラ切り。内面: ロクロナデ。灰色 (5Y6/2)。	5-1
2	堆積土	須恵器	壺	残存: 3/5。器高: 4.0cm、口径: 13.4cm、底径: 5.6cm、外面: ロクロナデ。灰黄色 (2.5Y6/2)。 底面: 回転糸切り。内面: ロクロナデ。灰黄色 (2.5Y6/2)。	5-3
3	堆積土	須恵器	壺	残存: 3/5。器高: 6.8cm、口径: 12.8cm、底径: 6.8cm、外面: ロクロナデ。橙色 (7.5YR7/6)～明褐色 (7.5YR7/2)。 底面: 回転ヘラ切りの後周縁を持ちヘラケズリ。内面: ロクロナデ。橙色 (7.5YR7/6)。	5-4
4	外延溝	須恵器	壺	残存: 1/3。器高: 4.1cm、口径: 13.4cm、底径: 7.3cm、外面: ロクロナデ。浅黄褐色 (10YR8/3)。 内面: マツメ (回転ヘラ切りか)。内面: ロクロナデ。浅黄褐色 (10YR8/3)。	5-2
5	支脚上	土師器	甕	残存: 底部破片。器高: 3.8cm残存。底径: 8.0cm、外面: ロクロナデ。回転ヘラケズリ。 内面: 浅黄褐色 (10YR8/3)。底面: 回転糸切り。内面: ロクロナデ。浅黄褐色 (10YR8/3)。	5-5
6	支脚	土師器	甕	残存: 底部破片。器高: 6.1cm残存。底径: 8.2cm、外面: ヘラケズリ。褐灰色 (10YR5/1)～にぶい黄褐色 (7.5YR7/4)。 底面: 木葉模。内面: 見込みナデ。マツメ。灰黄褐色 (10YR5/2～6/2)。2枚の火を受けでもよい。	5-6
7	カマド支脚周辺	土師器	甕	残存: 底部。器高: 7.1cm残存。底径: 8.4cm、外面: ヘラケズリ。にぶい黄褐色 (10YR7/4)。 底面: ケズリ。内面: ヘラナデ。にぶい褐色 (7.5Y7/4)。	—
8	堆積土	土師器	甕	残存: 体部破片。器高: 2.3cm残存。底径: 6.2cm、外面: マツメ。横ナデか。にぶい黄褐色 (10YR6/3)～橙色 (5YR6/6)。 底面: ドーナツ状に粘土斑貼り付け。内面: マツメ。にぶい黄褐色 (10YR6/3)。	—
9	堆積土	土師器	甕	残存: 体部から底部。器高: 9.8cm残存。底径: 10.2cm、外面: マツメ。ロクロナデ、下端をヘラケズリ。浅黄褐色 (10YR8/3)。底面: マツメ。ケズリか。内面: ロクロナデ、底面付近をナデ。浅黄褐色 (10YR8/3)。	5-7
10	堆積土	須恵器	甕	残存: 体部破片。外面: 平行タキ。黒色 (N2/0)～にぶい赤褐色 (2.5YR4/3)。内面: 平行タキ。灰色 (N6/0)。	5-8
11	堆積土	鉄製品	刀子	残存: 刀部～茎部。残存長: 5.8cm、刀部: 幅1.2cm、厚さ0.2cm、平様か。茎部: 幅0.9cm、厚さ0.2cm、断面長方形。	—
12	堆積土	鉄製品	鉄鏃か	残存: 身部～茎部。残存長: 5.0cm、身部: 幅0.6～0.5cm、断面方形。茎部: 幅0.4～0.3cm、断面円形。	—
13	カマド天井崩壊土	土師器	甕	残存: 頂部から体部破片。器高: 18.3cm残存。外面: 横ナデ。ヘラケズリの後ヘラミガキ。橙色 (5YR6/6)。内面: ヘラナデ。にぶい褐色 (7.5YR7/3)。	5-11



第8図 1A号住居跡

第5表 1A号住居跡土層註記

層	土 色	土 製	含 有 物 等	堆積面積
69	暗褐色	10YR4/4 粘土質シルト		A周溝抜き
70	にぶい黄褐色	10YR4/3 粘土質シルト	暗褐色小ブロック、黄褐色土小ブロックをまばらに含む。	A周溝掘り方
71	褐色	10YR5/4 砂質シルト	暗褐色土粒を含む。全体に暗い。	A掘り方

【1 A号住居跡】

1 B号住居跡掘り方下部で確認された。遺構の残存状況から、住居跡の規模は1 B号住居跡よりやや小さく、方向はほぼ同一とみられる。壁材抜き取り痕跡及び壁材掘り方は住居跡北辺、北西隅付近、壁材掘り方が南辺で確認された。比較的状況の分かる北辺では壁材掘り方の規模は幅0.15～0.24m、深さは最大0.09mであり、断面形はU字形である。堆積土は暗褐色粘土質シルト小ブロック、黄褐色粘土質シルト小ブロックをまばらに含むにぶい黄褐色粘土質シルトで人為的な埋土である。壁材抜き取り痕跡は幅0.08mで、堆積土は暗褐色粘土質シルトである。

住居跡掘り方は北辺から西辺の壁際で確認された。北側では幅1.13m、西側では幅0.23～0.45mが確認され、深さは0.05～0.10m残存している。底面は竪穴中央から壁際に向かいゆるやかに傾斜する。堆積土は暗褐色土粒を含む褐色砂質シルトで人為的な埋土である。

遺物は出土していない。

【2号住居跡】

調査区中央付近に位置する。地山面（IV層）で検出された。平面形は隅丸長方形である。南北5.11m、東西4.43mであり、延床面積は22.6m²である。方向は西辺で計測するとN-13.5°-Wである。堆積土は大別4層が確認された。I層は黒褐色～黒色シルト、II層は灰白色火山灰層、III層は黒褐色粘土質シルトで竪穴中央付近にみられる。IV層は黒褐色粘土質シルトや暗褐色粘土質シルトであり、壁際に認められる初期堆積土である。レンズ状の堆積を示すことから自然堆積と考えられる。壁はほぼ垂直に立ち上がるもので、最も残りのよい東辺中央付近では高さ0.26m残存している。床面はほぼ平坦だが、南辺付近がやや高い。竪穴中央が地山、周辺に貼床が行われている。貼床は地山ブロックを多く含む黒褐色粘土質シルトで東側では特に粘性がある。竪穴中央が浅く、壁際にむかいや深くなる。厚さは0.04mである。また、北西側では貼床より掘り込まれ、周溝に壠される土坑状の落ち込みがみられる。平面形は長楕円形であり、規模は南北2.06m、東西0.75m、深さは床面より0.21mである。底面は皿状で壁はやや急に立ち上がる。堆積土は地山ブロック、黒褐色粘土質シルト小ブロックを含む褐色粘土であり、人為的に埋め戻されている。

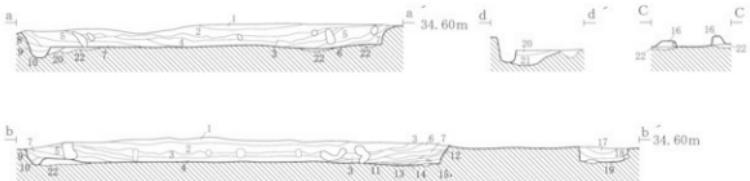
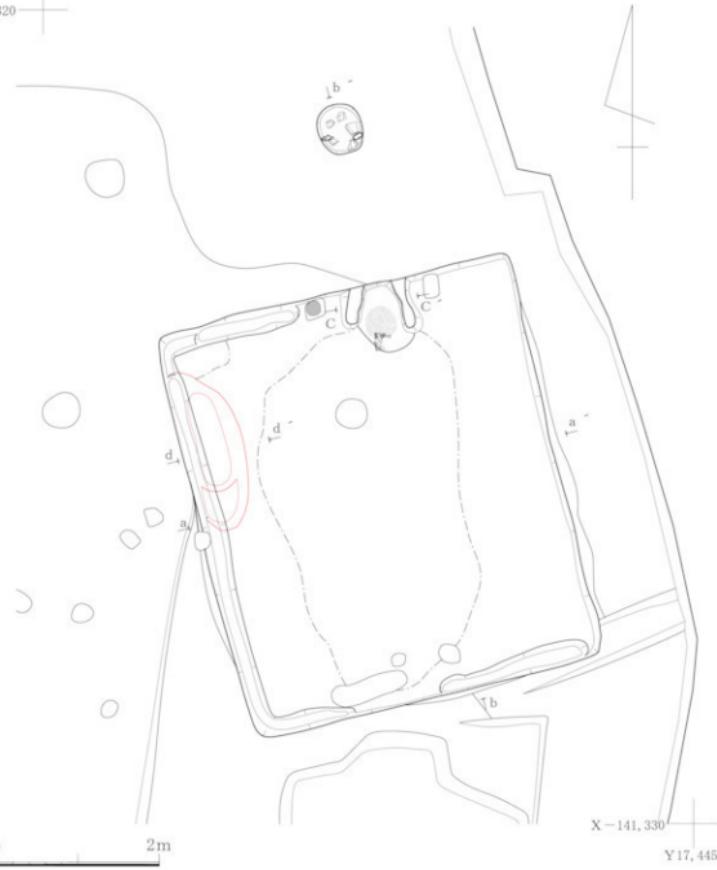
カマドは北辺ほぼ中央にある。竪穴内部に設けられた造り付けのカマドである。燃焼部と煙道部からなるが、煙道は確認されず、煙り出しピットのみが確認された。総長3.12mである。燃焼部は長さ0.87m、幅0.52m、底面はほぼ平坦であり、奥壁部分で急に立ち上がる。側壁はにぶい黄褐色粘土質シルトにより構築されおり、高さは0.16mである。天井部はカマド内部に崩落した状況で確認されている。底面及び奥壁、側壁は火熱を受け赤変している。底面の焼面規模は径0.36mである。煙り出しピットは長軸0.62m、短軸0.54mの楕円形であり、深さは0.16mである。底面はやや丸みを持つがほぼ平坦であり、壁は垂直に立ち上がる。燃焼部と煙り出しピットの距離は1.62mである。

周溝は北辺カマド西側から西辺、南辺の南までコの字状にめぐり、南辺の東側まで確認される。東辺、北辺東側では認識できなかった。幅0.22～0.29m、深さ0.04～0.08mであり、断面形はU字型である。堆積土は地山小ブロックを若干含む黒褐色シルトで、自然堆積である。

ピットは5基確認された。このうち、カマド西脇で確認されたピットで柱痕跡が確認されている。しかし、これ以外のピットは壁に入り込むことや堆積土の状況から木の根による搅乱とみられる。こ

Y17,437

X -141,320



第9図 2号住居跡

のため2号住居跡に伴う柱穴はないと考えられる。

遺物は堆積土及び床面上より須恵器壺、壺蓋、甕、土師器壺、甕の破片が出土した。床面上からの遺物はほとんどなく、これらは住居廃絶後に流れ込んだものと考えられる。須恵器壺の底部切り離しは回転糸切りのものと切り離し不明でナデ調整と回転ヘラ切りとみられるものがある。甕は外面、内面ともに平行タタキが施される。土師器壺は外面、内面ともにヘラミガキ・黒色処理される口縁部から体部の小破片が出土した。甕は製作にロクロを用いたものと用いないものがあり、長胴形のものが多いが、球胴のものとみられるものもある。製作にロクロを用いないものでは頸部に段を持つものもある。体部調整はヘラケズリされているものが多い。口縁部は断面が四角形のものが1点ある。カマド天井崩落土下、機能時の堆積土上面より土師器甕、煙出ピット底面直上より土師器甕が出土した。いずれも製作にロクロを用いており、体部に粘土が付着するものがある。

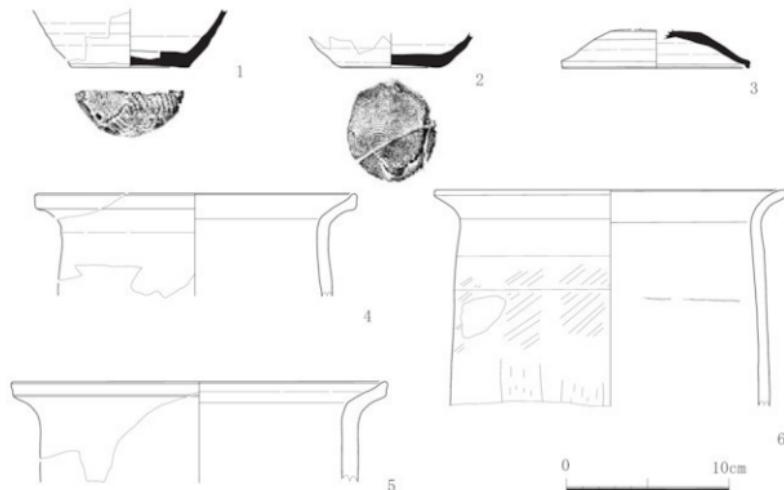
これらのうち器形や特徴がわかるものを図示した(第10図)。

第6表 2号住居跡土層註記

層	土 色	土 製	含 有 物 等	堆積面積
1	黒褐色	10YR3/2	シルト	堆積土
2	黒色	10YR2/1	シルト	
3	灰白色火山		にぶい黄褐色シルトを含む。	
4	灰黃褐色	10YR4/2	シルト	
5	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト	
6	黒褐色	10YR3/1	粘土質シルト	
7	黒褐色	10YR2/2	粘土質シルト	
8	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	
9	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	
10	黒褐色	10YR3/2	シルト	周溝
11	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	
12	灰黃褐色	10YR4/2	粘土質シルト	
13	灰黃褐色	10YR6/2	粘土質シルト	天井崩落土
14	焼土層		焼土粒を含む。	
15	黒褐色	5YR2/1	粘土質シルト	カマド機能時
16	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土質シルト	カマド側壁
17	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	煙出P
18	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	
19	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト	
20	褐色	10YR4/4	粘土	掘り方
21	褐色	10YR4/4	粘土	
22	黒褐色	10YR3/1	粘土質シルト	

2. 遺構外出土遺物について

盛り土から須恵器甕体部破片(外面に平行タタキ、内面無文)、旧表土とみられる黒褐色土、木の根とみられるカクランから土師器甕体部破片(外面ヘラケズリ)が若干出土したほか、1号住居跡上から近世から近代のものとみられる磁器や徳利、1号住居跡外延溝西側のカクランより近世陶器甕破片が出土している。



第10図 2号住居跡出土遺物

第7表 2号住居跡出土遺物観察表

No.	遺構名・層位	種別	器種	特徴	図版
1	堆積土	須恵器	壺	残存: 体下部～底部破片。器高: 3.5cm 残存。底径: 7.2cm。外面: ロクロナデ。灰白色 (5Y7/1)。底部: 回転糸切り。内面: ロクロナデ。剥離。灰白色 (5Y7/1)。	—
2	堆積土	須恵器	壺	残存: 体下部から底部。器高: 1.9cm 残存。底径: 6.0cm。外面: ロクロナデ。灰白色 (2.5Y7/1)。底部: 回転糸切り。内面: ロクロナデ。灰白色 (2.5Y7/1)。	—
3	堆積土	須恵器	壺蓋	残存: 4/5 (つまみ部欠損)。器高: 2.4cm 残存。口径: 11.2cm。外面: 回転ヘラケズリ。ロクロナデ。灰色 (N6/0)。内面: ロクロナデ。灰色 (N6/0)。	5-12
4	カマド天井崩 壟土	土師器	甕	残存: 口縁部から体部破片。器高: 6.3cm 残存。口径: 19.6cm。外面: ロクロナデ (カキ目風)。浅黄色 (2.5Y7/4)。内面: ロクロナデ (カキ目風)。にぶい黄橙色 (10YR7/3)。	5-13
5	カマド天井崩 壟土 堆積土	土師器	甕	残存: 口縁部から体部破片。器高: 6.2cm 残存。口径: 23.0cm。外面: ロクロナデ。マメヅ。浅黄橙色 (10YR8/3)。内面: ロクロナデ。マメヅ。にぶい橙色 (7.5YR7/4)。	5-14
6	煙出P底面	土師器	甕	残存: 口縁部から体部上半。器高: 13.2cm 残存。口径: 21.4～19.6cm。外面: 平行タタキの後ロクロナデ。体部下半はヘラケズリ。粘土付着。にぶい橙色 (7.5YR6/4)。内面: ロクロナデ。にぶい橙色 (7.5YR7/4)。	5-15

V. 考察

今回の調査で確認された遺構は堅穴住居跡2軒である。

1. 堅穴住居跡の年代について

(1) 出土遺物の特徴

①土師器

壺・高台壺、甕が出土している。いずれも破片であり、全体の器形が判明するものはない。壺・高台壺は製作にロクロを用いている。甕には製作にロクロを用いたものと用いないものがあり、用いないものは頭部に段を持つものがみられる。また、破片資料ではあるが、底部に粘土紐をドーナツ状に貼り付けるものがあり、原田遺跡S130に類例がある（宮城県教育委員会2009、32頁52）。

②須恵器

壺、壺蓋、甕が出土している。器形がわかる1号住居跡出土の須恵器壺4点のうち3点は底部から丸みを持って直線的に立ち上がる逆台形のものであり、口径と底径の比率をみると50パーセントを超える底径の大きいものである。底部切り離し技法は回転ヘラ切り、回転ヘラ切りの後再調整である。もう1点は底径の小さい体部がゆるやかに開きながら立ち上がり、口縁部が外反するもので、底部切り離しは回転糸切りである。2号住居跡出土の須恵器壺の器形は明確ではないが、底部切り離しは回転糸切りである。甕は全体の器形が判明するものではなく、体部破片のみが出土した。外面に平行タタキ、内面に平行タタキ、無文、青海波文が施され、内面平行タタキと無文のものに同一個体がある。

(2) 各住居跡の年代

各住居跡の堆積土から出土した遺物は製作にロクロを用いないものと用いる土師器、底部切り離しが回転ヘラ切り、回転ヘラ切りの後再調整、回転糸切り、回転糸切りの後再調整される須恵器壺があり、類似する。しかし、各住居跡の機能時から廃絶前後の層から出土した遺物をみると1B号住居跡は製作にロクロを用いないものと用いる土師器甕と2号住居跡は製作にロクロを用いる土師器甕という傾向が認められる（第8表）。遺物が少なく明確ではないが、2軒の住居跡には時間差があり、1B号住居跡は2号住居跡より古い可能性が考えられる。

第8表 各住居跡出土遺物の特徴

遺構	土 製	遺 物
1B号住居跡	カマド側壁下のカマド堆積土	土師器甕A類
	カマド古段階	土師器甕A類
	カマド新段階	土師器甕A類とB類 須恵器壺（回転ヘラ切りか）
2号住居跡	煙出ピット、カマド	土師器甕B類

(A…製作にロクロを用いない B…製作にロクロを用いる)

出土遺物のうち土師器の特徴から東北地方南部の土器編年では国分寺下層式から表形の入式（氏家和典1957）に該当するものと考えられる。源光遺跡1B号住居跡と類似する特徴をもつ土器群としては8世紀末葉から9世紀初頭頃に位置付けられている伊治城跡S104住居跡出土遺物（宮多研1978）やSI173出土遺物（築館町教育委員会1991）などがあり、源光遺跡1B号住居跡は8世紀末葉

から9世紀初頭頃のものと考えられる。2号住居跡出土遺物は土師器甕が製作にロクロを用いており、さらに堆積土出土ではあるが須恵器壺の底部切り離しは回転糸切りが多くなる傾向がある。1B号住居跡出土遺物よりも新しい要素も持つとみられ、9世紀前半頃のものと考えられる。

2. 堅穴住居跡の構造について

確認された2軒の堅穴住居跡は丘陵の平坦地点から西側にゆるやかに斜面する傾斜変換点付近に立地する。堅穴住居跡はいずれも5m程度の中型の住居である。主柱穴は確認されるものと確認されないものがある。カマドは北辺中央に位置している。カマドは堅穴内部に白色粘土を用いて構築されており、奥壁と煙道では段差を持つ。また、堅穴住居跡は2軒ともほぼ同一の方向をもつものである。

1号住居跡はAからBに造り替えられるとともに、1B号住居跡カマドは焼け面と支脚の関係から2時期が確認された。さらにカマド側壁下からはカマド堆積土と類似する層が残存しており、確認されたカマド本体以前にもカマドがあったとみられ、1B号住居跡はカマド本体の造り替えを行なながら、長期間使用されたと考えられる。また最終段階のカマドは天井部がわずかではあるが残存しており、カマド本体の高さが約27cm程度であることが確認できた。

2軒の住居跡は、主軸の方向がほぼ同一であること、北カマドであることから齊一性は高いと考えられるが、出土遺物からは時間差が認められ、遺構の確認状況から1A号住居跡→1B号住居跡→2号住居跡と変遷することが考えられる。同時には存在しない可能性が考えられるが、近接した時期に営まれた可能性が考えられる。

VI.まとめ

源光遺跡の発掘調査により、古代の堅穴住居跡2軒を確認することができた。確認された堅穴住居跡は出土遺物の検討から8世紀末葉から9世紀前半頃のものと考えられる。2軒の堅穴住居跡は直接の重複はないが、出土遺物からみると同時に存在しない可能性が考えられる。方向が類似することから近接した時期に営まれたと考えられる。また、特に1号住居跡ではAからBに造り替えられており、Bにおいてもカマド本体の造り替えや残存状況が良好であったことから貴重なデータを得ることができた。

今回の調査でほぼ同一の方向をもつ堅穴住居跡2軒が確認されており、原田遺跡、下萩沢遺跡の調査成果を含めると、周辺にはまばらではあるがさらに堅穴住居跡が存在すると想定される。源光遺跡や周辺における古代の集落構造の解明及び伊治城跡とのかかわりは今後の課題と考えられる。

引用・参考文献

- 氏家和典 1957 「東北土師器の形式分類とその編年」『歴史』第14輯 1-14頁 東北史学会
- 宮城県多賀城跡調査研究所1978『伊治城跡 I -昭和52年度発掘調査報告書-』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第3冊
- 塙館町教育委員会1991『伊治城跡-平成2年度発掘調査報告書-』塙館町文化財調査報告書第4集
- 塙館町教育委員会1993『伊治城跡-平成4年度発掘調査報告書-』塙館町文化財調査報告書第6集
- 佐藤敏幸2007「宮城県北部・沿岸部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』平成15年度～平成18年度科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書 研究代表者辻秀人 164-209頁
- 宮城県教育委員会2009『原田遺跡 下萩沢遺跡』宮城県文化財調査報告書第219集
- 栗原市教育委員会2011「源光遺跡」『平成23年度宮城県遺跡調査成果発表会資料』 59-62頁

写 真 図 版



1B号住居跡、南より



1B号住居跡カマド検出状況、南西より



1B号住居跡カマド（新段階）、南西より



1B号住居跡カマド（新段階）、南より



1B号住居跡カマド（古段階）、南より



1B号住居跡、南西より



1B号住居跡堆積状況、南西より



1B号住居跡カマド断面、南西より



1B号住居跡カマド側壁断面、南より



1B号住居跡カマド側壁除去状況、南より

写真図版2 1B号住居跡（2）



1 A号住居跡、南より



1 B号住居跡カマド周辺貼床・
1 A号住居跡壁材抜き取り痕跡断面、西より



1 A号住居跡壁材掘り方、西より



1 B号住居跡外延溝、東より



1 B号住居跡竪穴外延溝断面、東より

写真図版3 1 A号住居跡・1 B号住居跡（3）



2号住居跡、南より



堆積状況、南より



西辺周溝堆積状況、南より



カマド、南より



煙出しピット遺物出土状況、東より

写真図版4 2号住居跡

■ 1号住居跡 ■



■ 2号住居跡 ■



写真図版 5 出土遺物

報 告 書 抄 錄

ふりがな	げんこういせき							
書名	源光遺跡							
副書名	都市計画道路源光町田線内沢道路改良工事に伴う発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	栗原市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第15集							
編著者名	安達 誠仁							
編集機関	栗原市教育委員会							
所在地	〒989-5171 宮城県栗原市金成沢辺町沖200番地 TEL: 0228-42-3515							
発行年月日	西暦 2012年3月19日							
所収遺跡名	所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
源光遺跡	宮城県栗原市 築館字源光 内沢	042137	41068	38度 43分 46秒	141度 1分 50秒	20110629 ~ 20110824	328m ²	道路改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
源光遺跡	集落跡	奈良～平安	竪穴住居跡2軒	土師器、須恵器、 鉄製品				
要 約								
源光遺跡は一迫川の右岸、標高36mの低位段丘上に立地する古代の集落遺跡である。都市計画道路建設に伴い発掘調査を実施し、8世紀末葉から9世紀前半頃の竪穴住居跡が2軒確認された。特に残存状況のよい1号住居跡では、カマドの天井部が残存しており、カマド構造の詳細なデータを得ることができた。								

栗原市文化財調査報告書第15集

源光遺跡

— 都市計画道路源光町田線内沢道路改良工事に伴う発掘調査報告書 —

平成24年3月16日 印刷

平成24年3月19日 発行

発 行 宮城県栗原市教育委員会

〒989-5171

宮城県栗原市金成沢辺町沖200番地

TEL: 0228-42-3515 FAX: 0228-42-3518

印 刷 南部屋印刷株式会社

宮城県栗原市築館高田一丁目7番36号

TEL: 0228-22-2131 FAX: 0228-22-2175